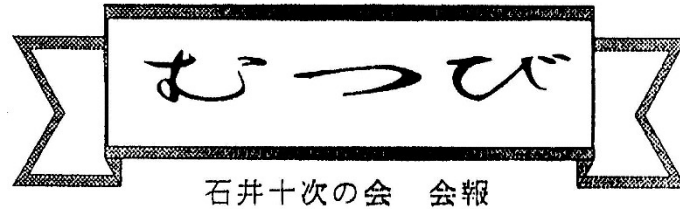


2022年
(令和4年)
7月12日



298号

出合い

宮崎県教育長 黒木淳一郎

竹之下先生から会報「むつび」の原稿を御依頼いただきました。石井十次先生を「わしの眼は十年先が見える」で存じ上げるばかりの浅学の身でありながら、お引き受けいたしました。それは、すぐに中学以来の友人坂田師通君が石井記念友愛社の理事として活躍していることに思い至ったからであります。今なお変わらぬ交友を続けてくれる得がたい友人です。彼に捧げる想いで、書かせていただきます。心より感謝申し上げます。

拙稿は石井十次先生の自律主義に通底する、主体性のある行動力をもった生徒との出合いを綴らせていただきます。

Learn from yesterday, live for today, hope for tomorrow.

The important thing is not to stop questioning.

過去から学び、
今日のために生き、
未来に対して希望をもつ。
大切なことは、
何も疑問をもたない状態に
陥らないことである。 アインシュタイン

「本土の山は高いですね」隣の女子生徒はこう言いました。

校長1年目の夏休み、これからの教育改革を学ぼうと福岡、沖縄へと足を運びました。10年ほど前の話です。

福岡。現行の大学入学共通テストが導入される前でした。文部科学省から導入に向けた進捗状況の説明がありました。次いで講師が登壇し、当時話題になっていた英語の四技能試験の重要性が説かれました。最もほしい情報の一つでした。そして最後にアクティブ・ラーニングについて学びました。最近はこのアクティブ・ラーニングということば自体は、あまり聞かれなくなりました。

そして、沖縄。講演では、同じく国の進捗状況の説明があり、その後九州各県よりアクティブ・ラーニングの実践事例の発表がありました。そこで出会ったのが、アインシュタインのことばです。那覇国際高校の発表の中で使われたことばでした。

実りの多い夏でした。本校の先生方にあれを伝えたい、これも紹介したいとの想いでいっぱいでした。

そして、冒頭の女子生徒との出会い。

宮崎へと帰る飛行機で隣に座った沖縄の女子高校生でした。

「まぶしくありませんか？」

離陸後、本を読んでいた私に右隣の窓際の女性が話しかけてきました。丁度、飛行機が雲を抜け、強烈な夏の日差しが窓から差し込んできたときでした。

「いいえ、大丈夫ですよ」

「初めて一人で飛行機に乗ったものですから。窓(のシェード)は開けたままでいいですか？」

「いいですよ。宮崎に一人ですか。親戚がいらっしゃるのですか？」

「いいえ。オープンキャンパスです」

「高校生？」

「はい」

聞けば、宮崎大学のオープンキャンパスに一人で行くところだったそうです。

宮崎市内に宿だけ取り、食事はコンビニで済ませ、インターネットで調べて、J Rとバスを乗り継いで、一人で医学部に向かうのだそうです。感心しました。

「医学部に行きます」

「宮崎大学は地域医療に力を入れています」

「地域医療を学んで、地域の役に立ちたいと思っています」

「沖縄はのんびりしています」

「だから本土で勉強したい」

「自分を向上させたいのです」

きらきらと目を輝かせ、自分の夢を語ってくれました。時間はあっという間に過ぎ、飛行機は宮崎に着きました。

驚きました。何という自立心、行動力、人間力。

「過去から学び、今日のために生き、未来に対して希望をもつ」

「大切なことは、何も疑問をもたない状態に陥らないことである」

いつの間にかアインシュタインのことばを頭の中で反芻していました。旅の最後に大きな贈り物をいただきました。

この話には実は後日談があります。

明けて2月、はがきが届きました。

「お久しぶりです。お元気ですか？ 今年の8月、飛行機で隣の席だったものです…」

お礼と近況報告でした。

しかし、中にはセンター試験が思うように行かなかったこと、浪人も視野に入れていること、それでもいつかは宮崎に行きたいこと…などが綴られていました。さぞかし無念であつたろうに。改めて何てすてきな生徒さんなんだろうと思いました。

同時に、きっとこの若者は自分の夢をつかむと確信しました。

こんなすてきな若者に宮崎の子どもたちを育てていきたい、そう思っています。

「十次の茶臼原憲法」と銘木^{こうやまき}高野槇への思い

宮崎支部 前支部長 飯尾 彪

平成14年木城中に校長として就任し、友愛園の子ども達が険しい5キロの道を毎日元気よく登下校するのを初めて知った。各学年の全員が規律正しく将来の目標をもって学校生活を送っている姿を目にし、感動すら覚えたことがつい昨日のことのように思い出される。それまで石井十次についてあまりにも無知だった自分自身を恥じる気持ちに駆られた。あれから20年、石井十次について学び関わってきた当時を、多くの感謝を込めて懐かしく振り返る。

木城中は友愛園の子ども達の母校であるにも関わらず石井十次に関する物が余りにも少なく感じた。早速、顕彰会から十次の写真肖像画をいただき校長室に掲げさせてもらった。来客等の目にも触れ見守ってもらいながら仕事ができる幸せを感じた。また、正面玄関や生徒玄関が寂しい状況であったのでPTA会長さんに相談して町が保管していた貴重な銘木「高野槇^{こうやまき}」を分けてもらえることができた。現物を見て大変驚いた。何と 長さ6m 幅 1.1m 厚さ15cm 重量300kg超の樹齢何百年という巨木の一枚板であった。自然や文化の香りのする物で飾りたいという私の願いに相応しい素晴らしい物と出会えて、有効活用への思いが更に強まった。早速製材所で厚さを半分に2枚にして、1枚は学校の表札看板用と（小学校にも分ける）茶臼原憲法用（玄関に）、十次の自戒自規用（図書室に）に切り分けた。揮毫は時の牧草教育長はじめ町の書道家の先生に依頼し、全職員にも協力してもらって完成設置することができた。残りの1枚は会議応接用テーブルとして保護者の大工さんが制作して下さった。家族総出で作ったとの言葉には胸がつまり奉仕の心に深く感謝し頭が下がった。

木城の山奥で何百年という年月を経て育った運命の高野槇^{こうやまき}がこうして爽やかな香りのする玄関や校長室に蘇ったことは感慨深く、時の繋がりを実感した。併せて生徒玄関にある武者小路実篤の詩の扁額（松田省吾氏書・制作）も同じく高野槇^{こうやまき}である。個展での展示作品を幸いにも薄謝で入手することができた。

「むつび」本年5月号に現木城中佐藤校長先生が十次の憲法を写真入りで紹介されていた。実に懐かしく思い、今回そのいきさつ等記述した次第である。

時は流れ、来年には「みどりの杜・木城学園」となり、小・中一貫校として新しくスタートされとのこと。校長先生の文章から十次の業績や精神をこれからも引き継いでいかれることを確信し、嬉しい限りである。友愛園の子ども達がこの先も生き生きと輝き、高野槇^{こうやまき}のように逞しく成長していくことを願い、また1歩歴史を刻んでいって欲しい。石井十次と出会った木城中時代から宮崎支部会員としての今日まで、微力ながら多くの方々と関わりお世話になってきた。残された人生を、あらためて原点に立ち返り私もまた1歩を踏み出したい。

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【西都市】酒井良子

【えびの市】松永康二

【高鍋町】松村スミ子 岡本良子

【椎葉村】大木場俊弘

【大阪府】西村智晴

【福岡県】師村妙石

（株）ミノテック

★ご寄付をいただきました

（敬称略）

【宮崎市】横山久美子 鈴木敏裕

荒木恵津子 黒水斐子

谷口眞由美

【都城市】山下正男 山下和子

前田重治

【高鍋町】松井有

【東京都】林知尚

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により6月20日までのものとしています。

★8月号の通信発送作業

8月 9日（火）9時から

8月10日（水）9時から

簡単な作業です。どなたでも参加できます。初めての方はお電話ください。お待ちしております。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町椎木644-1

後援会「石井十次の会」

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

yuuaisya-uujinokai@kijo.jp

●高鍋高校正門に建つ「石井十次 帰国途上の所感」歌碑

「ア、美なるかな日向の地、予は実に爾^よを愛す。^{なんじ}」

ア、壮なるかな太平洋、予は実に爾を愛す。」

十次は明治27年3月29日、高鍋に一時帰国しました。まだ鉄道のない時代に、細島港に船で上陸した十次は、細島街道とよばれた山道をガタガタの馬車に揺られて高鍋に向かいます。日向灘を一望した十次の口からほとぼしり出たのがこの言葉でした。「帰国途上の所感」と名付けられたこの歌には、十次の故郷・日向国高鍋への思いが溢れています。歌は次のように続きます。



「帰国途上の所感」の歌碑

「南北四十四里、東西二十里なる日向の原野よ。

爾は予等イスラエルのために備えられたるカナンにあらずや。

人間は環境によって教育せらるるものとせば、爾高鍋よ、爾は予が理想的人物を養成するに於いて、最も適當のところなり。」

この理想にそって、十次は明治41年に孤児院の全員を茶臼原に移します。320ヘクタールの地に50余棟の教室や宿舎を建設し、理想の教育を目指します。

歌は次のように締めくくられています。

「ア、美なるかな尾鈴山。ア、壮なるかな太平洋。」

昭和47年9月、高鍋高校は創立50周年を記念してこの歌碑を正門内側に建立しました。

松浦三州校長（当時）は、その理由を「石井十次は高鍋を理想的人物を養成するに最適の場所と考えた。これら先人の功績と伝統は今なお高鍋高校に厳然と生きる。」と説明しています。



歌碑が設けられた高鍋高校正門

*編集後記

「むつび」巻頭の1～2頁は宮崎県教育長・黒木淳一郎様に玉稿をいただきました。感謝いたします。自己の将来を信じて行動する、すてきな女子高校生との出会いがつづられた文章に感動しました。

*文責 石川正樹